

「蠟型石膏鑄造とその作品展開」

大桃 洋三

＜はじめに＞

金属の鑄造技術は、古来青銅器や銅鐸、銅矛、仏像などの特別なものをつくるものとして扱われてきたが、鑄造技術の発達とともに量産が可能になると、それはより身近なものになっていった。現代では、その量産性の高さから機械部品をはじめ、マンホールの蓋、エンジンなど、私たちの生活に欠かすことのできないものとなった。近代以降の立体造形においては、より自由度の高い表現が可能であるため、ジュエリーのようにとても小さく細かなものから室内に展示する工芸・彫刻作品、また大型の野外彫刻にも用いられる素材と技法である。

ひと言に鑄造といっても日本の伝統的な技法である土を鑄型に使う真土型や耐火性のある石膏を鑄型に用いる石膏型、主に工業製品で使われている砂を鑄型にする生型など…。その種類は目的に合わせ、多種多様である。その中で私が好んで用いている技法は蠟型石膏鑄造である。

＜蠟型石膏鑄造について＞

私が蠟型鑄造に感じる魅力は、作品に自由奔放な造形表現が可能である点である。例えば、ジャコメッティーのブロンズ彫刻にみられる荒々しいタッチと針金のように細い体をした人体表現や、鑄型に石膏を用いていないが蠟型としては共通している宮田宏平のジュエリーに見られる蠟の引き目をいかした伸びやかで繊細な表現、また蠟型石膏鑄造は別名イタリア式鑄造と呼ばれ、イタリアの三大彫刻家といわれるマリーニ、マンズー、ファッツィーニらはそれぞれに蠟の特性や鑄造技術を最大限に生かしたブロンズ彫刻を生んだ。

蠟型鑄造の作り手の表現手段、方法によってどのようにも対応できる柔軟性は他の技法には真似できない可能性が秘められている。

蠟型石膏鑄造の工程は以下のとおりである。

- 1) 粘土原型（雄型）制作後、石膏型（雌型）をとる
- 2) 石膏型から蠟原型（雄型）をとる
- 3) 蠟原型に上がり（ガス抜けのため）と湯道（金属が流れる道）をつける
- 4) 鑄型を耐火性のある石膏で蠟原型を埋没させるようにつくる。大きい作品の場合、「中子」という型もあわせてつくる。中子がずれないように筭（コウガイ）を蠟に刺し込む（タイヤキの皮がワックス原型、餡子が中子、焼く鉄の型が鑄型とイメージしてもらいとわかりやすいだろう）
- 5) 蠟が失われ、鑄型の水分が完全になくなるまで焼成する。これにより蠟と同じ形の空洞が鑄型の中に生まれる
- 6) 焼成した鑄型を土間に埋め、溶解した金属を流し込む
- 7) 金属が冷えた後、鑄型を壊し、湯道を切断する
- 8) 湯道の痕跡や鑄造欠陥をヤスリなどで削り、形を仕上げる
- 9) 色上げをする（色上げはたいいてい薬品と金属の化学反応によるものであるため、塗り色にはない自然で深みのある色がうまれる）



粘土原型



ワックス原型（湯道・筭付）

これをふまえて他の鑄造技法と比較すると、日本の伝統的な真土型では、原型が複雑な形状である場合、型の中に「寄せ」という更に細かい型が必要になるため、型取りはとても複雑なものになってしまう。それとともに型と型の合わせ目にするバリの問題などもある。蠟型石膏鑄造では、蠟原型を仕上げた段階での微妙なタッチや複雑な入り組みもそのまま金属になり、蠟原型をより忠実に再現することができる。つまり、作り手にとってより直接的な表現方法といえる。

＜作品について＞

私が蠟型石膏鑄造技法によってこれまで制作してきたいくつかの作品を紹介したい。



「閃々」（2000年制作）

高揚感などのみずみずしい感情が身体という器から溢れだす様子を表現した。



「ひだー未発の世界から」(修了制作)

私がある作品をみていると息も詰まるよう濃密な空気感を感じることがあった。それは、まるで「匂い」を発しているようであった。そのとき感じた感覚を表現しようとしたとき、作品内部に空間を巻き込むのと同時に、作品外部の空間を切り裂くような形が生まれた。



「夜にうごめくもの」(2005年制作)

夜が音もなく忍び寄ってくる得体の知れない生き物のように感じられることがある。不穏な気配を感じつつも、それをみたいと思う好奇心はエロスを含んでいる。



「それでも君は」(2004年制作)

不安定に立つ生き物が、身を振じらせ、もだえながらも成長しようとする姿を自分または社会と重ね合わせて表現した。



「残響」(2005年制作)

深夜、浅い眠りから目を覚ますと夢と現実の区別がつかず、不思議な感覚に陥ることがある。

夢と現実にはっきりした境界線はなく、曖昧なゆるい境界線上を私たちは右往左往しながら生きているのかもしれない。

これらの作品で私は、粘土原型からつくった形に石膏型では型どりがむずかしい複雑なディテールの表情を蠟から直接つくり、組み見合わせることで粘土による量感と蠟による繊細な形の変化、その両方をいかせる作品制作を心がけた。

<おわりに>

私は実験的に「day trippers」（2005年制作）という小作品を制作した。



水に溶けた蠟を直接流し込んでみると蠟の温度、流し込む勢い、水面に対する流し込んだ角度などの要素が絡み合い、その瞬間、瞬間で様々な蠟の表情がうまれる。形にひとつとして同じ形はない。そのようにしてできた形と、ひとつの石膏型から複数の蠟原型とを組み合わせると類似性を持ちながらもすべて異なった作品ができた。写真では5体だが30体ほど制作し単体としてではなく、集合体として見せる効果もねらった。

私は「day trippers」での展開を今後の作品展開につなげたいと考えている。ひとつの石膏型から複数の蠟原型がとれる石膏型の量産性とそれぞれ異なった形をした蠟原型の組み合わせることで生まれる可変的な表現の広がりを模索したいと考えている。

私は、鋳物が持つ豊かな量感にひかれ、鋳造による立体造形を行いはじめた。最初は石膏型から抜ける形のことばかり気にしてしまい、発想は貧困なものであった。しかし、制作を重ね、素材に直接触れることで、先に述べたような蠟型石膏鋳造のもつ自由さに気づいていった。

雪国の冬空は毎日のように厚く重い鉛色の雲に覆われている。しかし、たまに見える晴れた空の開放感は、常に晴れた土地にいる人々より強く感じることができる。鋳造に限らず、造形表現もそれと似たもののように感じる。思うような形を獲得することができず、つらい思いをすることは多々あるが、創作する現場で「こんなことができるのか」と新たな発見があると、表現の可能性の広がりを感じ、発想の広がりが生まれる。そんなときに訪れる開放感が作品にも備われればと考えている。